

[論 文]

社会学的教育実践としてのサービスラーニングⅡ

SERVICE-LEARNING As an Educational Practice of Sociology part 2

吉 良 伸 一

Kira Shinichi

1、各国の青年ボランティア活動

ギャラップ・インターナショナル「国際世論調査ーボランティア活動」(2005年12月公表)^{*1}では、世界中の人々の28%が、「過去1年間にボランティア活動に参加したことがある」と報告している。国別にみると、ノルウェー(67%)、カナダ(57%)、スイス(50%)、米国(44%)などがボランティア活動への参加率が高く、フランス(30%)、ドイツ(29%)、イギリス(30%)などの先進国が平均並、日本(25%)、韓国(22%)は全体平均に比べやや低く、同じアジアのベトナム(48%)、タイ(46%)より低かった。

2006年9月米国労働省労働統計局の調査では、全米の16歳以上の国民の26.7%がボランティア活動に参加している。約85万団体におよぶNPOがあらゆる世代のコミュニティ活動実践の場を提供している。身近なボランティアセンターが様々な活動の情報を提供し、活動の結果は社会的に大きく評価される。若者には学校教育とコミュニティサービスを結びつけたサービスラーニングが推奨され全米の46%の公立高校でプログラムが実践されている。Points of Light Instituteが全米のボランティアセンターを支援し、ボランティアセンターやホームページによって自分に適した活動が容易にみつけられる。ボランティア活動の経験が大学入試や企業の採用の際に評価される。またボランティア活動を行うNPOは寄附控除や税制の優遇等の支援があり、安定的に活動を行う仕組みがある。^{*2}

連邦政府によるボランティア活動推進機関がCorporation for National and Community Service (CNCS)である。CNCSによって、K-12(初等中等教育 kindergarden to twelve)および大学生を対象にした、Learn and Serve America Grant Program、18歳以上の若者を対象としたVolunteers in Service to America (VISTA)、AmeriCorps NCCC (National Civilian Community Corps)、AmeriCorps State and National Programなどが実施されている。

Corporation for National Serve Lern and Serve Americaによる連邦政府による支援プログラムでは、幼稚園から大学生を対象にしたサービスラーニング活動プログラム(州政府・NPO等が実施)に助成し、年間約100万人が参加している。活動分野は教育・環境・社会の安全、その他未解決のヒューマンニーズである。

サービスラーニングを全米大学の半数以上が導入しており、高等教育のサービスラーニ

ングはK-12（初等中等教育）より専門的で学業との結びつき強い。Volunteers in Service to America（VISTA）では18歳以上の若者が貧困地域でボランティアを行い、年間6,500人以上が参加する。AmeriCorps State and National Programでは18歳以上の若者が州やNPOの実施する活動に参加、年間約55,000人が参加している。年間100時間以上からPresident's Student Serve Awardsが表彰され、その中から達成度・ニーズへの対応・参加・継続性で評価され、3000から5000の候補の中から20程度の受賞者・団体がPresident's Serve Awardsとして大統領から表彰される。

2005年に日本学生支援機構が収容定員2000人以上の大学の3分の2で行った『学生ボランティア調査』*3では、ボランティア活動を現在している18.1%・以前したことがある47.1%で、合計65%の学生がボランティアの経験ありと答えている。1997年の調査では、現在している7.2%、以前したことがある33.5%で、現在している・したことがあるをあわせて、2005年では24.5%も増加している。全米では3分の2の大学生が現在ボランティア活動に関わっているという調査結果があり、実際に行っている学生を比べると少ないが、経験者はかなり多くなったといえよう。男性より女性、社会福祉系・教育学部系で経験者が多い。内容は「子どもたちにスポーツ、レクリエーションなどの指導をする」39.8%、「自然や環境を守る」37.4%、「お年寄りや障害のある人を助ける」28.3%などとなっている。活動のきっかけは「自発的意志で」55.6%、「大学のサークルなどで参加する機会があって」42.5%、「友人や知人に勧められて」23.2%などが多く、「福祉施設や学校などの呼びかけに応じて」10.3%、「授業でボランティアやNPOのことを学んで」6.8%と、学校をきっかけにした活動はあまり多くない。

2、サービラーニングの理論

授業カリキュラムに組み込まれたボランティアなどの取組をサービラーニングという。20世紀初めのウィリアム・ジェームス（William James）やジョン・デューイ（John Dewey）などのプラグマティズムを思想的原点とする。1930年代のニューディール期における市民保全部隊（Civilian Conservation Corp）や、1960年代の平和部隊（Peace Corps）などの活動もナショナルサービスとよび、広い意味でのサービラーニングの一つとされている。1969年、アトランタでサービラーニングという名を用いた研究集会が開かれ、1970年代連邦政府は高校生・大学生のサービラーニングに支援をはじめた。1985年、大学連合組織「キャンパス・コンパクトCampus Compact」が結成される。2004年では高校42%・中学31%・小学22%でサービラーニングが実施されている。

サービラーニングとは、サービスの提供者と受け手の双方の変化を意図して、サービスの目標と学習目標を結合する。自己の振り返りと自己発見、価値観・スキル・知識の獲得と理解といった課題につながるよう機会と、サービスの課題を結びあわすことで実現される。たとえば、川でゴミを拾うだけではサービラーニングとはいえないが、学校での教科教育と組み合わせ、ゴミを分析する・ゴミを減らす提案をする・その結果を住民と分かち合うことによって、コミュニティーと学生の双方にとって有益な取組となる。*4

サービラーニングとは何かを論じるとき、学生の成長のためにどのような条件を満た

すべきかを考える方がわかりやすい。サービスラーニングとは

- ①コミュニティを改善するために学術的・社会的・個人的スキルを応用するものであること。
- ②仮想ではなく現実の結果を伴う決定をする。
- ③個人として成長し仲間からの尊敬を獲得し、市民としての社会参加の増大につながる。
- ④いかなるレベルであれ成功体験を伴うこと。
- ⑤他者を助けることで、チームとして働き、自ら動き、問題を解決し、能力を示すことで指導力を高めること。^{*5}

サービスラーニングについて良く聞かれる質問は次のようなものである。

- ①コミュニティサービスやボランティアとどう違うかということ。サービスラーニングは学生の教育がその核心にある。活動の中で様々な領域の知識を動員し結びつけ理解する。そのプロセスで学習の意味を理解する。
- ②サービスラーニングをすると忙しくなるか。たしかに忙しくはなるがその成果は他では得られないものである。
- ③コミュニティとは何か。国際支援などグローバルなコミュニティであることもある。学校社会という小さなコミュニティであることもある。その活動によって、レベルは様々である。

サービスの種類は、①ダイレクトサービス 難民を助けるなど、②間接的サービス 食糧配給所への寄付など。③啓発的サービス Advocacy service 公的な問題への関心を高め行動を促す。④リサーチ 情報を集め分析・報告など、様々である。

K-12 (幼稚園から高校までの12年間)におけるサービスラーニングの質的保証基準 K-12 Service-Learning Standards for Quality Practiceでは、

- ①意義あるサービス 社会的ニーズのあるもの。参加者の発達段階に合致していること。参加者に情報提供を行い、その意義が十分に理解されていること。
- ②カリキュラムとのリンク 学習目標と合致していること。知識やスキルの応用ができること。
- ③振り返り Reflection 分析や社会との関係を考える機会が十分に与えられていること。
- ④多様性 多様な見方があり得ること。意見や文化を異なるものへの尊重が考慮されること。解決・合意形成に向けての努力が行われること。
- ⑤若者の意見の反映 Youth Voice 学生がお客様になってないか。学生の意見が十分反映されうるか。
- ⑥パートナーシップ 多様なパートナーが存在しているか。学校・家庭・地域のメンバーや組織で、ビジョン・ゴール・知識の共有が行われているか。
- ⑦進展のモニタリング サービス活動と学習目標について成果把握が常に行われているか。
- ⑧持続と集中 持続し集中して取り組んでいるか、などが必要とされている。

サービスラーニングの一般的な課題として、考えられることは以下のようなことである。

- ①根本的問題 義務化や必修化の是非、サービス活動と教科活動の内容の乖離、教員やスタッフの役割と指導性、活動におけるリスク＝マネジメント
- ②差し迫った現状の問題 学力向上策への傾斜、財政・運営支援後退
- ③高等教育機関としての課題 専門性の向上、地域づくりや社会貢献の意義の深化、サービスラーニング研究センターとしての役割を担う必要がある。

3、米国におけるサービスラーニング視察報告

大学教育推進プログラム（A）によって、平成22年2月、今後のサービスラーニングをすすめる参考とするため、米国カリフォルニア州サンフランシスコ市周辺の視察を行った。米国各地には大学におけるサービスラーニングを推進するキャンパスコンパクト事務局が各州にあり、定期的にFDミーティングを実施し、サービスラーニング方法の研究会や情報交換を行っている。キャンパスコンパクト・カリフォルニア州事務局に、視察を受け入れてくれる大学を打診してもらい、ノートルダム・ド・ナミュール大学とドミニカン大学カリフォルニア校に訪問できることとなった。また、カリフォルニア州事務局で行われるミーティングにもオブザーバーとして受け入れてもらえることとなった。2校ともカソリック系の大学であり、カリフォルニアという比較的リベラルな土地柄であり、これが平均的なアメリカのサービスラーニングのあり方であるかどうかはわからない。限られた時間のなかで貴重な情報を得ることができた。受け入れを快く承諾していただいた両大学とキャンパスコンパクト・カリフォルニア事務局（Cal Corps）に感謝申し上げたい。日程は2月22日 Notre Dame de Namur University、2月23日 Dominican University、2月24日 Cal Corps - Public Service Center である。^{*6}

（1）ノートルダム・ド・ナミュール大学 Notre Dame de Namur University

ノートルダム大学は、1851年に設立されたカトリック系大学で、フランス革命期に移民してきた女性に教育の機会を与えることを目的として建学された。現在では男女共学であるが、多様なエスニシティを積極的に受け入れている。サンフランシスコ郊外の自然に囲まれた高級住宅地、ベルモントに立地し、恵まれた環境にある。学生規模は1,600人程度、芸術から自然科学まで様々な学部があり、職のための道具だけでなく教養教育（liberal arts）が行われている。コミュニケーションによってつくられる共通善（common good）を実現することと、地域社会に根差した学習（CBL：Community Based-Learning）を特徴とする大学である。

サービスラーニングは社会正義のため不平等を克服する。社会改革のための市民参加を目的とする。学期中のコースと課外活動の週を組み合わせたプログラム。専門科目と課外活動を組み合わせたCo-カリキュラムとして実施され、キャンパスコンパクトの協力でFDに取組、3年前、補助金でセンターを設立している。体験メニューは地元の博物館や民間施設で企画展示を行う「キュレーター育成」、絵画教室などをホームレスのシェルターと連携して行う「アートセラピー」、ドラッグなどのインナーシティ問題を実地で体験する「インナーシティへ行く」、子どもに科学に対する関心をもってもらうための「科学

チューター」など23種類のメニューが用意されている。

こうした体験メニューの地域側の協力者であるコミュニティーパートナーは、教員が教育研究活動をつうじて知り合ったパートナーがコアとなっているが、ホームページによるサービスラーニングの活動報告をつうじて関心を持った団体などが大学にアプローチしてくる場合もある。体験の評価について、リフレクション（振り返り）が重視されている。リフレクションの方法を教えるプレリフレクションが充分行われ、現場で何が期待されていたか、現場での責任を認識していたか、コミュニティーパートナーとの関係が互恵的であったかなどのポイントが、活動に先立って提示される。学生からのレポートについては、専門科目と関連させ、学術的な観点から評価する。

様々な専攻における必修クラスでコミュニティーでの経験をクラスで語り、共有することによって、それぞれの意識が高まっていく。また、アカデミックなものとのつながりをつけることで、関心のある生徒が集まってくるという側面もある。このプログラムを行っていくことが、大学としてのコミュニティーでの位置づけ、特徴にもなっている。

大学の理念がはっきりしていて、カソリックに基づく、社会的不平等に対する高い問題意識がベースにあり、それが教育とサービスをリンクさせている。社会科学だけでなく、理系やビジネス専攻も含まれていて、学際的であった。それぞれの教員はCBLに対してその意義を理解し、自らのコースを通して積極的に関わっている。コミュニティーとの関わり方や分析方法は異なるが、成果を通じて分野を超えた学問とサービスとのリンクに関する共通認識が生まれているように見える。

(2) ドミニカン大学 Dominican University

ドミニカン大学は、1890年に設立されたカトリック系の伝統をくむリベラルアーツ大学で、西部の名門である。学生規模は2,100人程度、学部は芸術、人文社会科学、自然科学、ビジネス系など、30以上の専攻に分かれ、少人数教育を実践している。また、「グローバルな市民として、高い倫理観と社会的責任感をもつリーダーの育成」を理念とする人材育成を行っている。

サービスラーニングは、学生が自ら培った倫理観と専門性を思う存分発揮できる場であるとしている。ノートルダム大学と同様、Co-カリキュラムとしていることや、キャンパスコンパクトの補助金をいかして実施している。プログラムを開始して6年目である。

地域の古老から生活史を聞き取って、歴史博物館にコンテンツを提供する「オーラルヒストリー」、貧困層に配食サービスをしながら、栄養学を活かす「食の福祉と栄養学」、貧困地区やオルタナティブ高校の子どもに授業をして、教育の必要性を考える「チューター育成」、アートでコミュニティー再生に取り組む「水彩画プロジェクト」、社会的マイノリティーに対する理解を深める「AIDSの啓発・支援」など、22種類のメニューが用意されていた。コミュニティーを強化することで、学問と実践をリンクさせ、コミュニティーと教育のよりよい相互関係を構築していくことを重視している。コミュニティーが共同の教育者となり、生徒が市民となり、大学が地域・グローバルコミュニティーの活動的な一員となることを目指している。キャリア形成以上に、市民を育てることを目的としていることが印象的だった。

コミュニティパートナーとの関係づくりについては、サービスラーニングの目的と方法に関する理解の一致こそが、信頼関係の源泉であるとした。「サービスラーニングとは何か」に始まり、活動のデザイン、学生との接し方など、仔細にわたったインストラクションをパートナーに行っている。サービスラーニングの評価方法として、学生に対する教員およびパートナーによる評価、それに学生の自己評価とレポートを加味して、総合的に判断している。パートナーシップの成熟に向けて、「お互いの意志疎通は十分であったか」、「組織のゴール、個人のゴール、プロジェクトのゴールは一致していたか」などを各々が評価し、相互参照している。学生個々のリフレクションを促す仕掛けとしては、3つの“W”をフレームとして段階的に自己内省を深める作業を丹念に行うという。

What : 出会った人、行った場所、相互作用、出来事

So What : それに対する解釈、意味づけ、自分の感想

Now what : 学んだことの応用、「大きな絵」、新たな行動

(3) キャンパスコンパクトカルフォルニア事務局 (Cal Corps -Public Service Center)

大学等の教育機関から25～30名が参加、それぞれのサービスラーニングの経験を持ちより議論を行う。今回の議題は、コミュニティーインパクト(サービスラーニングのコミュニティーに対する効果)とデータベース構築についてであった。参加者はサービスラーニングを実際に運営するコーディネーターが多いようであった。教科教育(class education)を担当する教員と学生の調整連絡や実際の地域活動の運営を任されることが多いようである。会話から教員はもっと現場に顔を出すべきだといった発言が多く聞かれた。実際の活動の運営はコーディネーターが担当することが多く、最も熱心に意見交換に参加しているようである。修士課程修了者が多いようである。グループに分かれたグループセッション2回とそこでの議論の内容を共有し議論する全体討議が行われた。全体討議は書記による手書きで大きな紙に書いて壁に並べていく。

コミュニティーインパクトについて、参加学生数・活動時間など、途上国に教科書を送る活動であれば教科書の数など数値化できる部分もある。活動時間を履修単位に換算するなどの工夫もある。本当に効果があったかをどう測るかは困難な問題である。学んだ経験を新しい学生に伝えることにより、よりインパクトを高めることができる。数頁のエッセイを提出させホームページで読めるようにするなどの工夫が報告された。サンフランシスコ市立大学は125の組織とパートナーシップを結んでいるが、学部(faculty)とコミュニティーメンバーとの間にコミュニケーションが充分ないことが指摘された。このため効果がはっきりわからない。また有効な改善ができない。そのほか、インターンシップの利用や、コミュニティーパートナーからの提案などどうマッチングするかという話題がだされた。

データベースについて、様々な活動をデータベースにして互いの参考にしようという計画が話されていた。グーグルマップを利用して活動場所をマッピングすることなどが提案されていた。担当者が経験や問題を共有しともに考えていくという会合であった。問題の直接的解決と言うよりは方向性や問題の認識に役立つようである。先進的取組を紹介して参考にするといいことが可能になっているようである。

4、我々の実践

大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科は心理学・社会学・情報メディア・情報科学の4つの領域から成り、情報化に対応する能力とともに対人的コミュニケーション能力を身につけた地域を担う人材の育成を目的に、1992（平成4）年に設置された。1993（平成5）年から地域で活躍するリーダーを招いて講演をお願いする地域社会特講を開始した。以降、この講義を通じて多くの学生が地域活動やボランティア活動に参加してきた。2002（平成14）年、FIFAワールドカップ日韓共同開催を契機に、多くの学生が大分青年会議所の歓迎行事に参加したことから、大分青年会議所の協力を得て、インターンシップをはじめた。このころから、湯布院映画祭・おおいたたなばたまつり・上野の森アートフェスティバル・大分川リバーフェスタ（現在は中止）などに多くの教職員や学生が参加するようになった。2007（平成19）年度から、学んだことを地域で役立てる、地域で行動することで学びの意義を知り、自信力を高めることを目的に、サービ斯拉ーニングを単位化した（選択科目1単位）。情報コミュニケーション学科では、2008（平成20）年度からは、サービ斯拉ーニング（1単位）・インターンシップ（1単位1年前期）・海外語学研修（2単位）のなかから2単位を選択必修とした。他学科も共通教育科目（1単位）として履修可能。

サービ斯拉ーニングは以下のような方法で実施される。①地域社会特講（情報コミュニケーション学科必修・他学科は共通教育科目）で関係団体の方に講演をお願いし、学生の参加を呼びかける。②地域イベントの企画・運営・参加、NPO法人との連携、学内外での情報発信、学内外での環境活動など、多くのプログラムを教職員とともに設定し、多くの学生が参加できるよう心がけた。③社会学・心理学・情報科学・メディア学などで学んだことを活かすとともにその意義を学ぶ。体験しながら考え、考えながら行動する体験型学習を実施する。④サービ斯拉ーニング発表会・社会調査発表会・卒業研究発表会などプレゼンテーションを行い、活動の意味を振り返り他者に伝える訓練を行う。⑤学内報・学科ホームページ・DVD作成、パンフレット作成などを通じて、広く社会にその内容を知ってもらおう。すべての活動で可能なわけではないが、情報発信をつうじて学生・教職員・関係者から広く意見を聞き、意見を元に活動のあり方を修正していけるように努力した。

我々のこうした取組は、2009（平成21）年度文部科学省大学教育推進プログラムに選定され、平成21年度はサービ斯拉ーニング発信用ホームページ・学内動画配信システムも本格的に稼働した。平成22年度にはサンフランシスコでのサービ斯拉ーニングの視察や国内先進地の視察をふまえ、授業科目として「ナラティブ能力育成プログラム」を開設した。この科目を使って、活動の振り返りや情報発信を行っている。サービ斯拉ーニング単位修得者は平成23年度238名となっている。平成23年5月の本科在学生のうち793名30%が、単位修得の最低基準の30時間以上の地域活動を行っている。

サービ斯拉ーニングの実際面として、卒業研究などのゼミの学生であれば定期的に連絡が取れるが、そうでない場合や休み中など情報伝達や連絡が困難である。地域社会特講（通年）を通じた紹介や連絡、掲示板を使った連絡などを行っているが、コミュニケーションが困難である。大学教育推進プログラムによって、地域活動携帯連絡システムを導

入した。これはグループウェアの一種であり、学生に携帯から学期ごとに登録をさせ、登録した学生に一斉にメールを配信するシステムである。届いたかどうかのチェック、学生がメールを開いたかどうかのチェックができる。また、簡単なアンケート機能がついていて、たとえば出席するかどうかボタンを押してもらいチェックできるシステムになっている。様々な活動ごとにグループ分けして情報発信ができる。こうした機能が使えるフリーソフトはグーグルなどであるようだ。また、活動レポートはホームページ上から送れるようにしたが、学生別・活動別・学期別に集計・出力できるようにした。レポートをデータベースとして利用して、活動内容を次の世代に受け継ぐことができるようにした。

レポートの内容は次のようなものである。アメリカの視察がたいへん役に立った。

- 1、学科・番号・氏名・活動名称(選択式)・活動日時時間(システムで時間集計可能)
- 2、この活動を選んだ理由
- 3、実際に行った作業や活動内容
- 4、どんな人と出会い、どんなコミュニケーションをとったか
- 5、どのような困難を感じ、その解決にむけてどう工夫したか
- 6、活動する上で日頃勉強していることをどう役立てたか
- 7、活動から学んだこと、さらに学びたいと思ったこと
- 8、活動の社会的背景や意義について、わかったこと
- 9、活動をとおしてあなたの自己評価はどう変わったか

レポートは活動ごとに提出期限が設定できるようになっており、なるべく記憶が薄れないうちに投稿するように指導している。レポートに記述すべき内容はあらかじめ学生に示して、質問の意図を説明している。たとえば、困難を感じたことなどなかったではなく、困難にチャレンジするように、どんな人と出会ったかただ事実を記入するのではなく、いろんな人と話すようにとあらかじめ指示している。これは一種のプレリフレクションである。

5、本年度の活動

時 期	活 動 名
前 期	
4月15～17日	別府八湯日韓次世代交流映画祭
5月8日	日田市天瀬町ローズヒルあまがせ遊花祭
6月5日	府内学生エコフェスタ
7月18日	テオ・ヤンセン展ワークショップ
7月23日	鶴崎清正公二十三夜祭
7月30～31日	竹田交流食育ツーリズム研修・農家民泊
8月1日	竹田交流中心市街地活性化ワークショップ
8月5日	大分七夕まつり
8月27日	竹田交流第1回スローライフ講座「竹田の夏休み2011」
9月10日	竹田交流第2回スローライフ講座「楽市楽座in竹田」

時 期	活 動 名
後 期	
10月8日	竹田交流まちなか個店調査
10月11日	おおいた夢色音楽祭
10月13日	ローズヒルあまがせ「風と遊ぼう」
10月23日	竹田交流スローフードとの出会いin大分
11月5日	さかのせき地域発見サイクリング
11月19・20日	竹田交流まちなか個店調査・竹楽
11月27日	府内スマホ映画祭

本年度に実施した主な活動が上の表である*7。別府八湯日韓次世代交流映画祭は昨年、本学を事務局にスタート、今回は第2回目。本学メディア担当教授（元毎日新聞ソウル特派員）が中心となって運営している。今年は文化庁の助成（地域文化芸術振興プラン）を受けて、本学の教員・学生らが企画、運営などの業務にあたった。韓国の国民俳優アン・ソングさんの特集する映画祭であり、本人自選の映画8本を集中上映する。本人や夫人のほか、数々の共演作がある俳優パク・チュンファンさん、アン氏を作品に起用した小栗康平監督（「眠る男」）や、イ・ミョンセ監督（「人情事情お構いなし」ほか）が来場する。「別府八湯de韓流シネマ」をキャッチフレーズに、映画祭のプレ・イベントとして、別府市内5か所の温泉地でミニ上映会を開催した。

日田市天瀬町ローズヒルあまがせ遊花祭（5月8日）、ローズヒルあまがせ「風と遊ぼう」（10月13日）はともに、天瀬グリーンツーリズム研究会と提携して行った活動である。日田市天瀬町で体験型の農家民泊をおこなっているグループが、ローズヒルあまがせ（農業公園）の閉鎖されていたレストラン施設を借りて、2009年レストラン「風の丘」を経営。自分たちでつくった桑の実ジャム・桑の葉茶・ゆず胡椒などを販売している。学生は体験宿泊など交流を行い。春と秋のバラ祭りのイベント開催などに協力している。ブースをつくって親子連れなどが楽しめるワークショップを実施している。

テオ・ヤンセン展ワークショップは、大分市・大分合同新聞が大分市美術館で開催した「テオ・ヤンセン展」に協力して実施した。オランダのアーティスト、テオ・ヤンセンはプラスチックや木材、ペットボトルなどを活用して、風を動力とするビーチアニマルを制作した。国連環境計画の2009エコフェスティバルでエコアワードを受賞、SONYやBMW等のCMでビーチアニマルが起用された。情報コミュニケーション学科の情報とメディア担当の教員が指導してレプリカを作成、大分七夕まつりで他の学校が作成したビーチアニマルとともに披露した。本学では、テオ・ヤンセン事務局の講演、テオ・ヤンセン氏の講演を行ったほか、大分市美術館での子ども向けワークショップの開催などに協力した。作成したビーチアニマルは鶴崎二十三夜祭・第1回スローライフ講座・ローズヒルあまがせ「風と遊ぼう」などで実際に子どもに動かしてもらったワークショップを行った。第1回スローライフ講座・大分県立芸術文化短期大学ホームカミングデイではビーチアニマルの脚をつくるワークショップなどを行った。

鶴崎清正公二十三夜祭（7月23日）は旧熊本藩の飛び地であった鶴崎で毎年加藤清正の

命日7月23日に国道を歩行者天国として行われる。鶴崎商工青年部と毎週金曜昼休みに会合を開いて企画を練っていった。今年は仮装競歩リレーの企画・運営・子ども向けワークショップ・エコステーション運営などを担当した。またポスター・ホームページの作成を担当した。

大分七夕まつり・夢色音楽祭は大分青年会議所と提携して実施している。青年会議所が運営する大分活性化ネットワーク（携帯で連絡し・会議を行って・イベントなどの運営を行う）に学生が加入して実施している。このほか、青年会議所九州ブロック大会の企画を学生に担当させてもらい、アートパフォーマンスなどを実施した。11月一連の活動が終わったあとで報告会・シンポジウムが行われ、いいリフレクションができたと思う。この携帯連絡システムを本学でも導入した。

竹田芸文短大交流は、3年前から竹田市で実施している、とうきび収穫体験や農泊体験・市街地交流・スローライフ講座などの活動をベースに、農村からまちなかに対象を広げ実施した。竹田の中心市街地の活性化をめざして、竹田商工会議所・竹田町商店街振興組合・たけた食育ネット等と共同で実施することになった。これまでの活動で作成したホームページ「たけたみつけた<http://cis.oita-pjc.ac.jp/taketa/index.html>」を拡張し、情報発信を行うことにした。活動ブログ「たけた2011 <http://taketa2011.junglekouen.com>」をつくって情報発信を行った。以下、この活動について詳しく紹介する。

① 8月1日（月）竹田中心市街地活性化ワークショップ

7月31日に本学学生19名が、竹田市菅生とうきび早朝収穫体験を行い、同日、とうきびフェスタに参加して、8月1日農家民泊で宿泊した。8月1日に大分からバスでやってきた学生32名と合流して51名の学生が竹田中心市街地活性化ワークショップに参加した。竹田商工会議所で、竹田経済活性化促進協議会活性化推進室長による「たけた食育ツーリズムの取組」の講演を聞き、ボランティアガイドのみなさんの案内で竹田中心市街地のまちあるきを行った。午後からは竹田商工会議所専務理事「竹田のまちづくり」講演、NPO法人アートスタジオオフィス代表佐藤知博氏によるワークショップを行った。ワークショップでは商工会議所・商店街振興組合・市議会議員など多くの方々と一緒にこれからの「竹田芸文短大交流活動」についての食、歴史・文化、音楽・アート、情報発信など4班に分かれ基本的アイデアを話し合った。

② 8月27日（土）第1回スローライフ講座

昨年度、大分県立芸術文化短期大学で「スローライフ講座」を実施、竹田の農家の方に、学生と一般市民一緒になって、竹田の食を教えもらいながら食べ物をつくる、公開講座(?)を実施した。この「スローライフ講座」を竹田のまちなかに戻して実施することを考えた。竹田側からは竹田の農家の食と城下町の食のワークショップを開催してもらう。大分県立芸術文化短期大学からは音楽コンサートや美術などのワークショップをまちなかで実施した。夏休み終わりに近く「竹田の夏休み2011」と題して子ども向けワークショップを実施した。計画が立ち上がったのが大学の夏休み中であつたため準備が充分とはいえなかった。広報は不十分であつたわりに、子ども連れでかなり賑わった。参加学生26名

③9月10日（土）第2回スローライフ講座

音楽科学生15名による「サン・サーンズ動物の謝肉祭から」を演奏。また、美術科講師による「自然モビールをつくろう」や本学美術科の卒業生による「コースターペイント」、学生有志によるポップス演奏を実施した。当日は、他の学校行事や地域の行事と重なったために参加者が少なかった。学生20名参加。9月27日（火）地域社会特講の時間に竹田町商店街理事長、竹田商工会議所専務が活動の呼びかけを行った。

③10月8日（土）竹田中心商店街個店調査

竹田中心商店街の個店の魅力を発掘し、商店街の状況を把握するために、竹田まちなか商店調査を情報コミュニケーション学科の学生13名と社会学の教員3名で実施

④10月23日（日）第8回地産地消スローフードとの出会いinおおいた・楽市楽座

10月23日（日）竹田芸文短大交流によって、竹田分館いこいの家で行われた「第8回地産地消スローフードとの出会いinおおいた」と、竹田中心市街地で行われた「イザベル音楽祭」および「楽市楽座」に参加。「第8回地産地消スローフードとの出会いinおおいた」では、開会に先立って本学音楽科教授（ヴァイオリン）の指揮による弦楽コンサート、本学の学生は、午前中に商店街調査や会場設営の手伝いを行い、午後は主催者側の好意で「スローフード」体験を楽しみ、小泉先生の講演を聴く。また、同日行われた「八幡山縁日楽市楽座」と「イザベル音楽祭」にも和太鼓サークルと学生のバンドが参加。そのほかにスローフード出展ブースの撮影、イベントの撮影（動画・静止画）などを行った。サービスラーニング参加学生20名（バンド3名を含む）・管弦楽音楽科学生12名（卒業生4名を含む）・和太鼓サークル7名・計39名。

⑤11月19日・20日 竹田竹楽

11月18～20日が竹楽であるが、18日（金）は授業のため、19日・20日に参加した。20日は推薦入試のために教員は行かなかった。学生は午前中は個店調査の残りを実施、午後から地産地消村・屋台村などの手伝い・地図などのピラ配り・地産地消村の撮影（動画・静止画）・竹楽の様子の撮影を行った。学生19日18名参加・20日8名参加。今後の竹田交流の予定（確定分）である。

⑥12月17日（土）第3回スローライフ講座「キャンドルナイトinたけた」

キャンドルナイトとは冬至と夏至の日に電気を消して地球環境や地球に住むあらゆる生物について考える催しである。竹田出身で本学教員を務められ、昨年逝去された佐藤武郎先生の遺作展を竹田のまちなかで実施。子どもなどを対象に廃油でのキャンドルづくり、牛乳パックでのランタンづくり、声楽・オペラサークル演奏会などを計画。なお、美術科のプロダクトデザインの教員の指導で、冬季期間中の電飾のデザインが現在進行中である。

⑦1月14日（金）第4回スローライフ講座「若者との対話inたけた」

これまで活動に参加した学生と竹田側の参加者として今後の竹田のまちづくりの討議を行う。個店調査結果の発表、平成20年国勢調査などの分析結果の発表などを行う。そのほか、竹田の関係者向けのホームページ・ブログ・ツイッター教室、動画撮影教室など竹田側からの情報発信に役立つ講座を予定。

この取組を行うにあたって、わたしたちは次のような方針を立てた。①本年度だけでなく継続的に行っていくこと。浸透するまでに、かなりの時間が必要とされる。効果が出るまで取組を改善する。②単発的・一時的な活動ではなく、ある程度、頻繁に活動を行うことで地域のにぎわいにつなげる必要がある。③芸術系の学科や、国際文化学科、情報コミュニケーション学科など大学の資源を有効に活用し効果がある活動にしていく。④情報発信など若者の得意とする能力を最大限引き出す工夫が必要であること。⑤計画・実行・チェック・改善というPDCAサイクルを確立して実効性のある活動に持って行くこと。活動するだけではなく、リフレクションが非常に重要である。本年度は、大分青年会議所や竹田商工会議所など各団体の協力を得て、活動フォーラムを行って、活動発表や振り返りを行った。平成24年2月1日には大分市コンパルホールで「地域活動フォーラム」を開催して、活動発表と振り返りを行う予定である。

*1 <http://www.nrc.co.jp/report/051222.html>

*2 「諸外国におけるボランティア活動に関する調査研究」 文部科学省委託調査 平成19年3月

*3 『学生ボランティア活動に関する調査報告書』、平成18年3月、独立行政法人日本学生支援機構。

*4 National Service-learning Clearinghouse
http://www.servicelearning.org/welcome/SL_is/index.html

*5 “The Complete Guide to Service Learning”, Cathryn Berger Kaye, M.A., free spirit publishing, 2010.

*6 執筆にあたっては視察に同行した本学講師高橋雅也「4. 3. 米国カルフォルニア州視察報告」『平成22年度文部科学省大学教育推進プログラムテーマA 体験をスキルに変えるナラティブ能力育成～サービスラーニングを中心とした自己の物語を探し創り発信する能力の形成プログラム～報告書』、大分県立芸術文化短期大学、2011、を参照した。また、同行した東北大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員（当時）PD恵羅さとみさんのメモにはずいぶん助けられた。

*7 情報コミュニケーション学科ホームページ<http://oitape-cis.jp/>の活動報告紹介2011で内容等について説明がある。大分県立芸術文化短期大学ホームページ<http://www.oita-pjc.ac.jp/>を参照されたい。